

非専門家を主体とする食糧備蓄に関するワークショップの設計・実装 —仙台市における乳幼児の母親を対象にして—

Design and Implementation of a Workshop on Disaster Food Reserves Organized by Non-Experts: A Case of Families with Infants in Sendai Area

佐藤美嶺^{1,2,3}、佐藤翔輔⁴
Mine SATO^{1,2,3} and Shosuke SATO⁴

¹ 防災士会みやぎ

Bosaishi Kai Miyagi

² 女性防災リーダーネットワーク

Bosai Leaders Network of Sendai Women

³ 西公園プレーパークの会

Nishi Koen Play Park

⁴ 東北大学災害科学国際研究所

International Research Institute of Disaster Science, Tohoku University

要約

本研究は、仙台市内において、乳幼児の母親が主催者となった備蓄食糧を考えるワークショップの企画プロセスとその結果について報告するものである。同ワークショップは、乳幼児の母親が集まる既存の団体からプロジェクトチームを構成し、食糧備蓄について考え、企画・運営を自分たちで行ってもらった。ワークショップは、乾パンを使ってお菓子の家を親子で作成するものとなった。ワークショップの終了後、参加した親子のみならず、主催者となった乳幼児の母親に対してインタビュー調査を行い、その効果を質的に考察した。

キーワード：備蓄食糧、乳幼児の母親、ワークショップ、質的研究

Summary

This paper investigates effectiveness of workshop on disaster food reserves organized by non-experts with participant observation and non-structured interview. In this case study, families in infant in Sendai city have built and eaten “a snack house” made from hardtacks on the workshop. As a result of the workshop, it is found that 1) the participants understood that hardtack is taste good and easy to stock though the workshop, 2) the opportunity reduced a feeling of hesitation of “disaster reduction” of both host members and participants, and 3) however, we have cleared the approach is necessary for the attachment of workshop design capacity on a routine basis and a close advisor to success.

Key words: disaster food reserve, infant, workshop, qualitative research

1. はじめに

東日本大震災から5年が経過し、被災地で当時10代～20代だった人達も親世代になってきている。また、震災直後に用意した備蓄食糧も更新の時期を迎えており、備蓄食糧への意識の高さを継続させることが課題となってきている。

子ども、特に幼少時期の子どもを持つ親にとって、「子どもを守りたい」と思うのはごく自然であり、それは普段の生活や防犯のほか、災害から命を守る「防災」も例外ではない。そのようなモチベーションに応える機会として、防災訓練や関連するイベントが挙げられる。一方で、このような防災の訓練やイベントには、子どもを守りたい母親世代の女性の参加率が低い傾向が見られる。原因としては、「楽しくない」「長い」「子連れで参加しにくい」などといったことがあげられ¹⁾²⁾、参加へのハードルが高いことが懸念材料になっている。

そこで、本研究では、防災の非専門家である乳幼児の母親が、自ら防災イベントの「主催者」になり、自身達が無理なく楽しく、かつ効果的な防災イベント（以下、ワークショップ）を設計・実装した。このようなワークショップを行うことで、乳幼児家庭の備蓄・災害食への抵抗感を払拭することを意図している。本稿では、実践例を通して、その効果・課題を明らかにすることを目的とする。

2. 研究方法

本研究は、1) 参与観察と、2) ワorkshop後のインタビュー調査の2つの手法でアプローチする。1) は、乳幼児の母親が集まる既存の団体からプロジェクトチームを構成し、食糧備蓄・災害食について考え、企画・運営を自分たちで行ってもらった過程を観察することで行う。2) は、企画・運営の担い手となった乳幼児の母親

責任著者：佐藤美嶺

E-mail: minesato.bosaicoza@gmail.com

2016年10月31日受付；2017年1月26日受理

Received October 31, 2016; Accepted January 26, 2017

や参加者した母親を対象にして、非構造化インタビューを行う。

その他のアプローチの可能性として、質問紙調査による量的調査なども考えられるが、今回実施された防災イベントは屋外で行われたこともあり（後述）、母親は子どもから目を離すことができないという特性上、簡易に行うインタビューを行う質的調査のアプローチを採用した。

本稿では、防災の非専門家である乳幼児の母親の集団として、「西公園プレーパーク」を対象にした。宮城県仙台市にある「西公園」において、「子どもが自分で考えて自由に遊ぶ」を大切にしている遊び場を運営している団体である（写真1）^{3) 4)}。ワークショップの実施日は、乳幼児家庭の子育て支援のための、「ちびばーく」の開催日であり、お外育児の会あおぞらの活動日とした。

3. 結果

本章では参与観察にもとづいて、企画プロセスとワークショップ当日の様子について述べる。

(1) 企画プロセス

企画・運営のスケジュールの結果は、次の通りとなった。2015年12月7日は、西公園プレーパークのメンバーによる定例会が行われ、その中で企画（ワークショップ）を実施することそのものが決定された。筆頭著者によって、著者以外のメンバーが防災に関するワークショップを実施・企画することが提案され、それが承認された。2016年2月29日に、ワークショップのプロジェクトチームが立ち上がり、同日中に企画の概ねの内容について議



写真1 仙台市・西公園プレーパークの様子



写真2 企画に関する「おしゃべり会」の様子

論された。プロジェクトメンバーは、理事1名、プレリーダー1名、会員1名、有志2名の計5名で構成された。同日は、備蓄に関する思いや、準備物、完成イメージなど、具体的に詰めるため「おしゃべり会」のような形式で実施された（写真2）。「おしゃべり会」のような形式をとったのは、防災イベントに対する抵抗感を減らすためである。

企画立案の際に出されたアイデアは、例として次のようなものが挙げられる。「大きい家にするために、ダンボールで形を作って、アルミホイルを貼り付けよう。」「初めて食べる抵抗感を減らすことと、予算内で収めるために他のお菓子と混ぜよう」「ガナッシュで乾パンを貼り付けよう（寒さのため、チョコレートだけでは溶かしてもすぐに固まってしまうことを懸念してのアイデア）」「小さいお菓子でデコレーションしよう」「スキムミルクを飲んでみよう」「野菜スープに乾パンを入れてみよう」など、子ども達が楽しめそうなアイデアが出された。

図1に、企画の「おしゃべり会」を経て作成された分担表を示す。この分担表は、プロジェクトチームのメンバーが独自に作成したものである。

(2) ワークショップの内容・当日の様子

前節で述べた準備やその後の告知により、2016年3月9日10:50～15:00（水曜日、平日）にワークショップが開催された。当日の天候は曇りで、最高気温7.1℃であった。当日は、10:00に現地集合、10:30に作業打合せが行われた。参加したのは、19家族・45名となった。

10:50にお菓子の家づくりを開始した。お菓子の家を作った過程を次の通り示す：1) ダンボールで家の形を作り、アルミホイルを貼り付ける。2) チョコレートを温めた生クリームで溶かし、ガナッシュを作る。3) ガナッシュを塗り、乾パンやお菓子を貼り付ける。4) 年齢が違う子が一緒に作業できるように屋根と壁は別々の場所で作り、それぞれを合体させる（写真3）。

作業時間およそ1時間で、12:00の時点で「お菓子の家」

日付	内容	材料	量	準備担当
3月9日(水)	「乾パンでお菓子の家を作ろう」	ココア(orミロ)	1袋	
		スキムミルク	1袋	
	雨害時中止	板チョコ	5枚程度	湯せんで溶かす
		乾パン(サンリツ)	5袋	
	材料費：200円	マシュマロ	5袋	
	想定量：	食パン(ココア入)	2斤	すず、たえ
	15組親子	アルミホイル	1巻	
		サララップ		
		ヘラなど		
		お湯		すず
		家の土台		すず作成
当日参加者	材料代収入	円		
スタッフ&サポーター	すず：10時～	なおたろう：10時～	みねさん：10時～11時半、12時頃～	
	たえ：10時～13時半	みくちゃん：10時～17時	わかちゃん：	
	あおぞら：10時半～			
備考：	開いた段ボールにアルミホイルをかぶせたもので土台を作り、その上に溶かしたチョコで乾パンを貼っていく。 (一部は乾パンの代わりに食パンを切ったものも使用) 貼り終わったら組み立てて屋根をのせる。 市販のお菓子などで飾り付けもOK(あおぞらにお菓子持参のメールをする)			

図1 ワークショップの分担表

が完成した(写真4)。その後、スプレーチョコ、アラザン、チョコペンなどで飾り付けを行い、完成となった。完成時には、参加者から大きな歓声が上がった。そのすぐ後

に、食事をを行いおよそ15分程度でお菓子の家はなくなった。ワークショップそのものはこの時点で終了となったが、その後の公園解放は15:00までとなった。



お菓子の家の土台づくり



ガナッシュづくり



ガナッシュを塗って貼り付ける



屋根と壁を別々に作り合体

写真3 お菓子の家づくりの様子



飾り付けをして完成



次々手が伸びて口の中へ



最後は完食



みやぎテレビ「OH!パンドス」3月10日放送

写真4 お菓子の家完成と食事の様子

4. 考察

本章では、企画・運営の担い手となった乳幼児の母親（主催者）および参加者した母親（参加者）を対象にして、非構造化インタビューを行った結果について整理し、これを考察する。

(1) ワークショップの主催側に対する考察

- 1) 防災に関する主体性が引き上げられた：主催者の具体的な発話として、「受け身ではなく、自分たちで考えてやってみるという環境設定ができたことが良かった。(A氏)」「あつという間にどんどん話が進んで行くことにびっくりした。講師が話を進めるのではなく、プロジェクトチームが話を進めているという印象だった。(B氏)」「『遊び場づくり』という会の特性上、子どもたちが楽しんでいるのを大人が見守るという場面が多いが、今回は大人も参加して楽しめていたので良かった。(A氏)」があった。1つ目の発話は、今回のワークショップの趣旨である防災の非専門家が担い手になるということそのものに対する良い評価であり、2つ目の発話は防災の非専門家であったとしても企画進行を比較的スムーズにできたことに対する評価であり、「プロジェクトチームが話を進めている」とはまさに主体的に取り組んでいた表れである。また、3つ目の発話は、当初子どもをワークショップの参加対象として想定したにも関わらず、結果的には、主催側がサービス提供側にとどまらず、参加者と協働してワークショップに参加できていたことを示している。
- 2) 「防災」の「しきい」が下がった：主催者の具体的な発話として、「今回の防災イベントは、『ガッチリ（防災）』という感じではなく、楽しんでやれたのが良かった。(C氏)」「今まで防災に取り組んでこなかったお母さんたちが最近多く、防災を色濃く出したイベントだと、いつも遊びに来るお母さんたちが引いてしまうかもというのが心配だった。(C氏)」が挙げられる。これらは、「防災」を前面に出さず、「お菓子づくり」を強調したことで、多くの参加者が集まったことを示している。これは、同じく防災に抵抗感を感じている層が主催者となった効果であると言える。
- 3) 平時機能（プレーパーク）からの延長であったためにスムーズに企画・実施できた：主催者の具体的な発話として、「自分たちで色々決めたので、いつもの延長上で楽しく、遊びながら準備も当日もできた。(D氏)」「普段やっていることに近いので、取り入れやすかった。(C氏)」などがあった。これは、今回、担い手となった西公園プレーパークのスタッフが、普段から野外でのイベントを企画・実施していることが、今回の実施・実現に繋がったことを示している。
- 4) 自分たちに近い専門家が存在していたことがよかった：主催者の具体的な発話として、「年1回くらい何か防災イベントをやりたいと思っていたが、なかなか自分たちでは何をやっていいのかわからなかった。(C氏)」「筆頭著者（防災士）がいるということで、ヒントをもらえて、やってみようという気になった。(A氏)」があった。これらは、主催者グループに、そもそも防災イベントを持ちかけられるというきっかけや、立案する上での専門家からの一定のヒントや存在そのものから受ける安心感が存在していたことが分かる。

以上の1) 2) は、ワークショップにおいて、防災の非専門家である乳幼児の母親が担い手となった効果である一方、以上3) 4) はその実現には、平時機能と気軽にやりとりできる一定の専門家を要したという制約が読み取れる。

(2) ワークショップの参加者側に対する考察

- 1) 「防災」の「しきい」が下がった：参加者からの発話として、「今回のようなゆるい感じの防災イベントはみんな参加しやすい。(E氏)」「防災への入り口として最適だと思う。(F氏)」「自分ではなかなか思いつかないので、参加できて良かった。(G氏)」があった。これらから、同じような立場にたつ主催者の意図通り、参加しやすいイベントになったことが伺える。前節の2)にあるように、主催者側も参加者側も参加しやすく、これによって「防災」に関心を持てるきっかけになったことが分かる。
- 2) 乾パンをはじめとする、食材への抵抗感が払拭された：参加者からの発話として「子どもが『乾パンおいしい』って、食べていたのが印象的だった。(H氏)」「乾パンにチョコをつけただけでこんなに食べやすくなることにびっくりした。(I氏)」「乾パンをすごく久しぶりに食べた。(10年ぶりくらい) 子どもは初めて食べた。(J氏)」「おいしかった。おなかにすこくたまることがわかった。(K氏)」「乾パンがおいしく食べられる方法があるという発見ができた。(L氏ほか3名)」「久しぶりにスキムミルクを飲んだが、おいしくなっていてびっくりした。(M氏)」が挙げられる。これらは、そもそも乾パン等を普段食する機会がなく、自身や子どもが初めて食べて、意外にもおいしいことが分かり、これらの食材に関心が高まるきっかけが作られたことが分かる。
- 3) 子どもの成長を感じた：参加者からの発話として、「火の使い方（あつたかさ、あぶなさ）をもっとみんなに知ってほしいと思った。(火を見たことがない子どもが増えている。)(F氏)」「子どもがこんなに食べる事に驚いた。(N氏)」など、野外でのイベントならではの、参加した子どもが成長できる機会となったことが表れている。

以上のようなワークショップそのものに対する評価のほか、防災に関する新たな関心にまで発話が及んだことも特筆できる。下記に、これらを整理したものを示す。

- 1) 備蓄に関する新たな関心：「備蓄の基本的なところを知りたい。(O氏)」「食べ物以外の物は何を揃えたらいいのか。(P氏)」「みんなどれくらい備えをしているのか知りたい。(Q氏)」「どんなものをどんなところに置いておけばいいのか知りたい。(R氏)」
- 2) 住宅の耐震性に関する新たな関心：「耐震基準が変わった年があると聞いた事があるが、それがいつなのか知りたい。(S氏)」「住んでいるマンションの耐震強度が十分かは何を見ればわかるのか。(O氏)」
- 3) その他の新たな関心：「災害時の子どもの食事関係についてもっと知りたい。(G氏)」

5. おわりに

乳幼児家庭の備蓄・災害食への抵抗感を払拭するため、乳幼児の母親が集まる既存の団体を「主催者」とし、非専門家を主体としたワークショップを設計・実装した。その結果、1) 災害時に我慢して食べる非常食というイメージの乾パンを、非専門家のアイディアにより、子どもが美味しいと言って食べるお菓子や、スープに合う主

食として、無理なく食べて備蓄できる食材という認識に変えることができた。2)主催者の主体性が向上し、「防災」を身近に感じて企画・運営したことで、参加者も、抵抗感を払拭することができた。また、防災への新たな関心を持ってもらうことができた。3)しかし、今回のような手法は、①平時にイベントを企画・運営できる機能を持った団体であること、②相談できる専門家が近くにいることが必要条件であると言える。

これらの知見は、参与観察や限られたインタビューを用いた考察にもとづいている。別事例での検討や、量的な調査による妥当性の検証を今後の課題としたい。

参考文献

- 1) ベイキッズ：3.11 震災に関するアンケート、<http://baykids.jp/press/725.html/>
- 2) 毎日新聞：防災訓練、参加2割 人と防災未来センター、過去1年県内調査 / 兵庫、<http://mainichi.jp/articles/20160123/ddl/k28/040/477000c>、2016.1.23
- 3) 西公園プレーパークの会、<http://nishikouen-playpark.jimdo.com/>
- 4) 西公園プレーパークを支える会、<http://ameblo.jp/nishikouen-playpark/>